協働は一人では成しえない相乗効果により成果を達成するためのプロセスと考えられる。ここで示された協働の原則や条件を具体化し、それぞれの組織やグループがビジョンを常に分かちあい、関係性を保ちながら進めていくことが重要であろう。

D．　考察

ボランティアの活動においては参加意欲があってもその機会が得られない人々が多いため、ボランティアが自分の思いと一致するミッションを持ったグループでの参加が容易にできるようなシステムをそれぞれの地域で進めていく必要がある。ボランティアグループへの参加が可能となった人に対しても継続してその活動ができるような体制づくりが研修等を含めて行っていく必要があろう。

ボランティアグループにおいてはボランティアがその力を充分発揮できるようにグループ内そして対外的な面でのマネジメントが行えるボランティアコーディネーターが不可欠である。業務はボランティアのニーズを受け止め、活動の場を調整し、必要に応じ教育の場をつくること、他機関と野ネットワーク作りなど多岐にわたるため他業務との兼任ではなく専任で従事することが望ましいと考えられる。

協働についてはボランティアグループと他職種あるいは他機関が共に活動していく上では欠かせないプロセスであり、また相乗効果により一人では成しえない目的を果たすことが可能となるプロセスでもある。特に保健・福祉・医療の場面においては目的達成に関わる人々の持つ専門性を生かし、ネットワークを作りながら活動することがより効果的また効率的なサービスの提供につながると考えられる。

E．　結論

文献の検討から地域住民のボランティア参加意欲を実際の活動につなげていく方策を立てていく必要があること、またボランティアグループとしての活動を維持させるためのグループのミッションの確立と対外・対内の両方に働きかけが行えるボランティアコーディネーターがボランティアグループには必須であることが改めて認識できた。

協働は多くの専門性を持った人々が関わることで、一人では成しえない成果が達成できると考えられる。本研究の課題としてあげている地域緩和ケアの提供には欠かせないプロセスである。個々での文献検討を踏まえ、協働の考え方を地域緩和ケアチームの活動に具体的に生かしていくことが重要である。

F．　健康危機情報

特記事項なし

G．　研究発表

特になし

H.　知的財産権の出願・登録状況

特記事項なし

引用文献

- American Heritage Dictionary 4th edition (2000).
- 安梅勅江編著（2005）.コミュニティ・エンパワメントの技法、医歯薬出版株式会社、21.
- 碓井崧(2000). 碓井崧他編. 社会学の理論：176.
- 岩手県（2003）、ＮＰＯとの協働に向けて～ＮＰＯとの協働を進めるためのガイドライン～、6.
- 内山博史（2003）. 第5章協働の条件、新川達郎　監修、NPOと行政の手引き、大阪ボランティア協会、22.
- 内海成治他（1999）. ボランティア学を学ぶ人のために. 世界思想社. 6-10.
- 大久保規子（2002）.第3章NPOと行政の法関係、山本啓、雨宮孝子、新川達郎編著者、NPOと法・行政、80、ミネルヴァ書房.
- 大阪府（2001）.ＮＰＯとの協働を進めるためのガイドライン、7.
- 木原勝（2003）.NPOと行政の協働とは何か、新川達郎　監修、NPOと行政の手引き、大阪ボランティア協会、22.
- Opie, Ann (2000) .Thinking teams/thinking clients、Columbia University Press. 42.
- 桜井政成(2003). 複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析. 日本ＮＰＯ学会機関誌、112.
- 桜井政成(2005). ＮＰＯのＨＲＭとボランティアマネジメント. 吉田忠彦. 地域とＮＰＯのマネジメント. 晃洋書房、87.
- 坂本文武（2004）. ＮＰＯの経営－資金調達から運営まで. 日本経済新聞社、183-190, 214.
- 島田恒（2003）. 非営利組織研究. 文眞堂、182.
- 市民活力推進局市民協働推進部（2001）. 横浜市における市民活動との協働に関する基本方針（横浜コード）
- 杉野昭博(1995). ボランティアの比較文化論. 月刊福祉. 全国社会福祉協議会、66-73.
- スーザンエリス（2001）. 筒井のり子，妻鹿ふみ子，守本友美，訳. なぜボランティアか？－思いを生かすNPOの人づくり戦略. 海象社、10-13, 92.
- 全国社会福祉協議会（2005）. 2004年ボランティア活動年報. 全国社会福祉協議会:25

・ 田尾雅夫(2004). ボランティア・ＮＰＯの組織論. 学陽書房、83,97-99.
・ 瀧澤利行（2002）. 市民と行政との協働に関わる主体性と関係性、NPO と行政のパートナーシップはなりたつのか！？、東京ボランティア・市民活動センター、5-6.
・ 東京ボランティア・NPO との協働に関する検討委員会（2000）. 東京都ボランティア・ＮＰＯとの協働に関する検討委員会報告「協働の推進指針」策定への提言、16.
・ 筒井のり子(1990). ボランティアコーディネーター－理論と実際. 大阪ボランティア協会、3-6, 66.
・ 東京都生活文化局コミュニティ文化部（2000）. 特定非営利活動促進法施工後の市民活動団体の現状と課題に関する調査.
・ 日本ボランティアコーディネーター編(2002). ボランティアコーディネーター. 筒井書房.
・ 早瀬昇（1999）. ボランティア団体の組織と運営, 内海成治,入江幸男,水野義之,編. ボランティア学を学ぶ人のために. 世界思想社、43-46.
・ Ｐ．Ｆ．ドラッカー(1991). 非営利組織の経営－原理と実践, ダイヤモンド社、232.
・ Ｐ．Ｆ．ドラッカー(2000). 非営利組織の成果重視マネジメント, ダイヤモンド社.
・ Henneman, Elizabeth A., Lee, Jan L., Cohen, Joan I. (1995) .Collaboration: a concept analysis, Journal of Advance Nursing, 21,105.
・ 細田満和子（2004）. チーム医療とは何か、鷹野和美編著、チーム医療論、医歯薬出版株式会社、4-5.
・ 松尾武昌（2001）. ボランティアコーディネート論. 全国社会福祉協議会、64-67.
・ Meads, Geoffrey. Ashcroft, John. (2004) . The case for interprofessional collaboration, Blackwell、20-22.
・ Merriam-Webster Online Dictionary. http://www.m-w.com/dictionary.
・ 山内直人（1999）. ＮＰＯ入門, 日本経済新聞社.
・ 山内直人他（2004）. 財団法人地球産業文化研究所、協働のための企業・自治体の視点からの NPO 評価　調査報告、4、52.
・ 山岡義典（1997）.NPO 基礎講座－市民社会創造のために,ぎょうせい、9.
・ 巡静一, 早瀬昇編(1999).基礎から学ぶボランティアの理論と実際, 中央法規出版.
・ US Department of Defense Dictionary of Military and Associated words、(2003).

参考文献

（ボランティア・ＮＰＯ関連）

１．金子郁容(1992)．ボランティアーもうひとつの情報社会．岩波書店．

２．桜井政成(2005)．ライフサイクルからみたボランティア活動継続要因の差異．日本ＮＰＯ学会機関誌．

３．John M Bryson(1995)．Strategic Planning for Public and Nonprofit Organizations. Jossey-Bass Publishers.

４．田尾雅夫(1999)．ボランタリー組織の経営管理．有斐閣．

５．田尾雅夫（2001）．ボランティアを支える思想．アルヒーフ．

６．田中尚輝（1998）．ボランティアの時代－NPO が社会を変える．岩波書店．

７．塚本一郎、古川俊一、雨宮孝子編（2004）．NPO と新しい社会デザイン．同文館出版．

８．中田豊一（2000）．ボランティア未来論―私が気づけば社会が変わる．参加型開発研究所．

９．中村陽一(1999)．日本の NPO２０００，日本評論社．

１０．藤井敦史（1999）．組織科学 vol32.No4, NPO 概念の再検討：社会的使命を軸とした NPO 把握－市民事業組織の構想－．文眞堂．

１１．山岡義典(1998)．NPO 基礎講座２-市民活動の現在，ぎょうせい．

１２．山岡義典(1999)．NPO 基礎講座３-現場からみたマネジメント，ぎょうせい．

１３．山岡義典(2000)．NPO 実践講座-いかに組織を立ち上げるか，ぎょうせい．

１４．李妍焱(2002).ボランティア活動の理論と実際，ミネルヴァ書房．

（ボランティアコーディネーター関連）

１．巡静一(1996)．実践ボランティア・コーディネーター．中央法規出版

（ボランティアマネジメント関連）

１．A.ブルース、J.S.ペピトン(2002)．木内裕也訳．組織を救うモティベーター・マネジメント．ディスカヴァー・トゥエンティワン．

２．井田淳・梅本勝博(2003)．NPOのナレッジ・マネジメント．日本NPO学会機関誌．

３．Edgar H.Schein(1992)．Organizational Culture and Leadership. Jossey-Bass Publishers.

４．柏木宏(2004)．NPOマネジメントハンドブック－組織と事業の戦略的発想と手法．明石書店．

５．河口弘雄(2001)．NPOの実践経営学．NPOの実践経営学．

６．Kennede,L.W. Quality Management in the Nonprofit World. Jossey-Bass Publishers.

７．小島廣光(1998)．非営利組織の経営．北海道大学図書館刊行会．

８．Kotten. j （1997）．Strategic Management in Public and Nonprofit Organizations, 2nd ed, ．Praeger.
９．妻鹿ふみこ(1999)．地域福祉研究27巻，ボランティアマネジメントをめぐる一考察：ボランティア受け入れ組織のための方法論構築に向けて．日本生命済世会福祉事業部.
１０．島田恒(1999)．非営利組織のマネジメント．東洋経済新報社.
１１．スティーヴン・Ｐ・オズボーン(1999)．NPOマネージメントーボランタリー組織のマネージメントー．中央法規出版.
１２．田尾雅夫(1999)．ボランタリー組織の経営管理．有斐閣.
１３．塚本一郎、古川俊一、雨宮孝子編（2004）．NPOと新しい社会デザイン．同文館出版.
１４．Paul C. Light(2000). Making Nonprofits Work. Bookings Institution Press.
１５．吉田忠彦・桜井政成(2004)．生駒経済論叢1巻3号，戦略的人的資源管理論アプローチによるNPOのボランティアマネジメント．近畿大学経済学会.

（協働関係）
１．IIHOE研究所（2005）.都道府県、主要市におけるNPOとの協働環境に関する調査報告
２．Audrey Leathard ed.(2003). Interprofessional collaboration, Bunner-Routledge.
３．鈴木良美（2006）.コミュニティヘルスにおける協働（Collaboration in Community Healthー概念分析、日本看護科学学会誌、41-48.
４．渋川智明（2005）.福祉NPOー地域を支える市民起業ー、岩波新書.
５．社会福祉法全国社会福祉協議会全国ボランティア活動振興センター（2002）.住民参加型在宅福祉サービス団体等福祉NPO協働事業開発・促進事業　報告書。
６．鷹野和美編著（2002）.チーム医療論、医歯薬出版株式会社.
７．塚本一郎、古川俊一、雨宮孝子編著者（2004）．NPOと新しい社会デザイン．同文館出版.
８．東京都生活文化局都民協働部（2002）.市民活動団体基礎調査　報告書.
９．中川祥子、金子郁容（2003）．市民と行政のパートナーシップの実現方法と効果の測定ー横浜市パートナーシップ巣新モデル事業を事例としてー、The Nonprofit Review, 3(1), 69-83.
１０．中村陽一編（2003）.日本のNPO/２００１．株式会社日本評論社.54.山岡義則編著（2000）.NPO基礎知識ー市民社会の創造のためにー、ぎょうせい.
１１．Nikbakht-Van de Sande CV, van der Riit CC et al(2005). Function of local networks in palliative care: a Dutch view, Palliative Medicine, 8(4), 808-816.
１２．Vivian Martin, Anita Rogers(2004). Leading interprofessional teams in health and social care, Routledge.

１３．兵庫大学付属総合科学研究所編（2006）.参画と協働、神戸新聞総合出版センター.

（その他）

１．佐藤徹他（2006）．地域政策と市民参加－「市民参加」への多面的アプローチ．ぎょうせい.
２．渋川智明(2001)．福祉 NPO-地域を支える市民起業．岩波書店.
３．James E. Austin(2000)．The Collaboration Challenge．Jossey-Bass　Publishers.
４．電通総研編（1996）．ＮＰＯ（民間非営利組織）とは何か．日本経済新聞社.
５．東京ボランティア・市民活動センター(1997)．ボランティア・市民活動センター強化プラン作成ガイド．生産性出版.
６．藤井敦史(2004)．社会学年報第 33 号，NPO における＜市民的専門性＞の形成．東北社会学会.

厚生労働科学研究費補助金（医療安全・医療技術評価総合研究事業事業）
分担研究報告書

市民参加型地域緩和ケアシステム「家で死ねるまちづくり」の開発と評価

Ⅱ－３．　ホスピスボランティアのトレーニングプログラムの事例検証

主任研究者　　小松浩子　　聖路加看護大学看護学部　教授
分担研究者　　吉川菜穂子　聖路加看護大学看護学部　講師
研究協力者　　内田千佳子　聖路加看護大学客員研究員

研究要旨：
在宅ホスピスボランティアの育成プログラムの開発をする際の基礎資料として、Hospice Hawaiiによるモデル事業の視察を通して、ホスピスボランティアのトレーニングプログラムの事例を検証した。
平成18年６月28日から７月１日の間、既存のボランティアトレーニングプログラムを開催しているHospice Hawaiiの研修に参加し、在宅ホスピスケアにおけるボランティア活動の構成要素、及びボランティアを養成するための研修プログラムの構成要素を明らかにするために３回講座のプログラム研修を受けた。また、チームケアメンバーにインタビューを行った。さらに、Hospice Hawaiiでの実際の活動を理解するため、ホスピスハワイカイルアホーム（ホスピス病床）に見学に赴き、かつ、臨床チームケアメンバーの訪問同行を行った。
なかでも、主目的であるボランティアを養成するための研修プログラムの構成要素を検証したところ、ボランティアを養成するための研修プログラムについて、『ホスピスハワイ　ボランティアトレーニングマニュアル』から、「研修プログラムの目的」を筆頭に、「なぜ、ホスピスボランティアか」、「ホスピスの歴史的背景」、「ボランティアコーディネーターから」、「ホスピスハワイの概要」、「ホスピスハワイの組織図」、「ホスピスケアの考え」、「ボランティアの役割」、「守秘義務のフォーム」、「患者と家族の義務と権利」、「疼痛と症状コントロール」、「死に近づいた時のサインと症状」、「ボディメカニクスと気をつけること」、「心理社会的見解」、「文化的な視点」、「死別」、「スピリチュアルの問題」、といった項目の必要性が明らかとなった。また、研修トレーニングを受講し、実際に研修プログラムの構成要素が明らかとなった。

A.　目的

本研究は、市民参加型地域緩和ケアシステム「家で死ねるまちづくり」の開発と評価に向け、在宅ホスピスボランティアの育成プログラムの開発をする際の基礎資料として、Hospice Hawaiiによるモデル事業の視察を通して、

下記５つの視点からホスピスボランティアのトレーニングプログラムの事例を検証することを目的とする。

1．在宅ホスピスケアにおけるボランティア活動の構成要素を明らかにする。
2．ボランティアを養成するための研修プログラムの構成要素を明らかにする。
3．Hospice Hawaiiでの実際の活動を理解するため、ホスピスハワイカイルアホーム（ホスピス病床）見学
4．Hospice Hawaiiでの実際の活動を理解するため、臨床チームメンバーの訪問同行
5．ボランティアコーディネーターの教育及び役割を検証する。

B．　方法

平成18年6月28日から7月1日の間、既存のボランティアトレーニングプログラムを開催しているHospice Hawaiiの研修に参加し、在宅ホスピスケアにおけるボランティア活動の構成要素、及びボランティアを養成するための研修プログラムの構成要素を明らかにするために３回講座のプログラム研修を受け、かつCEO（総括責任者）であるKenneth Zeriと、チャプレンのClarence Liuにインタビューを行った。また、Hospice Hawaiiでの実際の活動を理解するため、ホスピスハワイカイルアホーム（ホスピス病床）に見学に赴き、かつ、臨床チームメンバーの訪問同行を行った。さらに、チームメンバーの一員であり、ボランティアトレーニングプログラムの企画運営に際し、重要な役割を担うボランティアコーディネーターにインタビューを行い、かつその活動を通して、ボランティアコーディネーターの教育及び役割について検証した。

C．　結果

目的１．　在宅ホスピスケアにおけるボランティア活動の構成要素を明らかにするため、３回講座のプログラム研修を受けた。プログラム内容は資料の通りである（添付資料１），（添付資料２）。研修を受けるにあたり、Hospice Hawaii のCEO（総括責任者）であるKenneth Zeriから米国のホスピスについて、チャプレンのClarence Liuからボランティアプログラムについてインタビューを行った。その結果を以下に示した。

6月28日水曜日12：00～　於）Hospice Hawaii
1.-4. 米国のホスピスについて
by　Kenneth Zeri（CEO）
5.-6. ボランティアプログラムについて
by Clarence Liu（チャプレン）

i）Hospice Hawaiiチームケアメンバーへのヒアリング結果

1．Hospice Hawaiiについて
by Kenneth Zeri（CEO）

HA-WAI-Iの語源
HA：神の息吹
WAI：水（生命が宿っている）
I：鼓舞された精神的な感情
⇒Spiritualに根ざしていた国である
図を用いてHospice Hawaiiの組織について説明【日本語訳組織図】（添付資料３）

2．Hospice Hawaiiで大切なこと
Doing vs Being
何かをするのでなく、存在すること。
やるのでなく、そこにいてあげること

3．ボランティアの役割

1）ボランティアが死という現実を受け止め、相手がこうしてほしいということを待って、相手がしたいことをする。

2）そのためには、自分を良く知る。自分の喪失（自分は何を失っているのか）を理解する。

3）ボランティアは、「何かをしよう」と思うと長続きしない。人に優しくすることや、人に何かをすることは大切であるが、ボランティアの大切なことは、相手に注意を向けることである。

4．ボランティアの領域（3領域）

1）Volunteer Visitors＝患者や家族を訪問する

2）Educate Volunteer ボランティア（一般市民や、関心のある市民、医療系の学生に対しての教育でもある）＝ボランティアプログラムは、教育啓発も使命である。

3）Change Culture（死に対する Avenue の文化を変えていく）

5．Spiritual Careについて

by ClarenceLiu（チャプレン）

Pay Attention＝注意を払うこと

1）そのものを見るようにする

2）見逃さずに見ていると自然発生的に、患者が何を欲しているのかみえてくる、それがみえてくるまで待つ

3）死の恐怖を追いやろうとするのでなく、悲嘆の気持をしっかり受け止める、そこにいてあげることの大切さ。

4）若い頃は皆、死を受容しなくてはならないと思っている。しかし、自分なりの形で死を迎える。その人なりの形で最期を迎えられるようにすること。

5）怒りをもって死を迎える人、ほっといてくれと思う人、それらを受け止めること。

6．ボランティアについて

by Caroline Odo（ボランティアコーディネーター）

ボランティア登録への手続き

1）面接時に以下の文書を渡す（ボランティアの概要説明）

ボランティアは何をするのか？

どうやったらボランティアになれるのか？

2）面接時に質問すること

① 何に興味があるか（患者とのマッチングのため）音楽？野球？

② どなたか近親者でなくなった人がいるか確認

面接時にあなたにどう影響を与えたか？そのことをどう思いますかと質問する

悲嘆にどう対応したかも確認

（注意）最近身近な人を亡くした場合は、1年間は対象外（ボランティアとして活動しない）

3）ホスピスプログラムの説明

・ホスピスハワイのケアのサービスを図で説明⇒「ケアの単位は家族と患者を1つの単位であると説明」

・患者と家族に対し、看護師の担当が決定し、この看護師がケースマネジャーの役割を果たす

・看護師の仕事（疼痛の管理、予期悲嘆も看護師の役割）についても話す。

・サービスを受けることが決まった場合、患者と家族に資料一式を渡すこ

とを伝える。なお、家族に渡す資料の中には、悲嘆のステージも説明されている。（実際に愛する人が亡くなる時に自分にどのようなことが起きるのか予測できるようにする）

・その他の看護師の役割の説明⇒患者の主治医と連絡をとりつづけること
　→痛みが強くなった場合等、患者の変化を主治医に伝える。

・法律に関すること：ソーシャルワーカーが担当していることを伝える。

⑥ 法律に関する手続きのほか、緩和ケア・ホスピスケア開始時は不要だったが、車椅子が必要になった場合に障害者用の駐車場が使用可能になるよう手続きをすることもソーシャルワーカーの仕事である。

⑦ 税金の支払いに関しても、患者のサポートを行う

⑧ ソーシャルワーカーは地域の資源を探してあげる（リビングウイル、委任状、どこの葬儀屋を使うか、家族が決めることをサポート）

・葬儀はどうしてほしいのか、患者にも意向を聞くように家族に伝える

・看護師とヘルパーが患者のケアの仕方を常に家族におしえていく

・家族は、患者が亡くなっていなくても、悲嘆の真っ只中にあるとどうしても集中できず、覚えきれないことも多いので、書いたものにして渡すようにしていることを伝える。

・チャプレンの仕事について説明（患者の中には、死ぬことを恐れている患者がいる。自分の心の中で自分の内面で何が起きているのかチャプレンの手を借りてはじめてその気持ちを表現できる人もいる。チャプレンは宗教を誰におしつけることもしない。信仰心のある家族に対して、宗教的な事柄については、神父や牧師、お坊さんなどその方達を呼ぶよう奨励するのがチャプレンの仕事。）

・アートセラピストの仕事について説明（自分の気持ちを表に出さず、すべて自分の内に閉じ込めて我慢しているタイプに有効である。アートセラピストが一緒になって絵を書く。明るく、美しい絵を表現した場合、死に対して受け入れられているかわかる。ところが、暗い絵で怒りを表現した場合、まだ、気持ちが落ち着かれていないようですね。と伝える。そして今どういう気持ちを感じていますか、どうして気分を害してしまったか、まだ若いのに病気になってしまったからでしょうか、もっといろんなことをお話してくださいと話す。）

4） ボランティアの仕事

・ボランティアが実際に患者をどう介護したらよいかわからない。という場合、ヘルパーがベッドから腰を痛めずに車イスへ移動の仕方を指導する。

・その後、患者が寝たきりになった場合、着替えやおむつ交換、シーツ交換も指導する。

5） 遺族へのプログラムについて

１年間は家族のフォローアップをする。特に結婚５０年を経た配偶者が一番孤独を感じる時は、葬儀後である。

電話で「外にでかけるようになりましたか？」と声をかけたり、遺族がうつにならないように注意する。

6）『遺族に対するサポートプログラム』

・ホスピスハワイのオフィスに毎月１回
・日中の１１時にキャッスルメディカルセンターで開いている。
・パールシティにある病院で夕方もしくは夜にサポートプログラムが開かれている。その他、子どもに対するサポートプログラムもある。（年齢別にグループ分けしている今、どういうことを感じているか、病気について伝えられていたか、をこのような境遇になったのは自分だけだと思っていたが、自分だけではないんだと知った。ここにきてよかった。）
・１週間のうち４時間、ボランティアが行くことで４時間家族がレスパイトできる。

ii）ボランティアに関することでの質疑応答

1）ボランティアが患者のもとに行くのはいつから？
⇒結核の検査をして、結核がないとわかれば、３回目のプログラムが終了直後に振り分けることもある。まず、面接をし、その後プログラム中はずっと観察をする。あとは、ボランティアコーディネーターの直感である。

2）患者や家族からのクレームはあるか？
⇒ある。その場合は、ボランティアを変える。当事者のボランティアにも説明する。

3）ボランティアプログラムについて：パリアンでは１２時間、ホスピスハワイは２０時間、この時間については、妥当である。パリアンでは、１年後アドバンスドコースを開発しており、訪問する場合はこのアドバンスドコースを受講する。それを含めると２０時間になる。

4）CEO（Kenneth）からの質問：その１年間は何をしているのか。
⇒手紙を書いたり、デイケアをしたり、グッズをつくる。ベッド下げのカバーをつくったりしている。

目的２．　ボランティアを養成するための研修プログラムの構成要素を明らかにするため、３回講座のプログラム研修を受けた。その結果、ホスピスハワイボランティアトレーニングマニュアル及びボランティアトレーニングプログラムが明らかとなった。以下の通りである（添付資料４），（添付資料５）。また、研修を受けるにあたり、ボランティアコーディネーターであるCaroline Odoからボランティアプログラムについてインタビューを行った。その結果を以下に示した。

6月28日水曜日12：00～　於）Hospice Hawaii
ボランティアについて
by　Caroline Odo（ボランティアコーディネーター）

i）『ホスピスハワイ　ボランティアトレーニングマニュアル』（添付資料４）

Ⅰ．ホスピスハワイトレーニングプログラムの目的
Ⅱ．なぜ、ホスピスボランティアか
Ⅲ．ホスピスの歴史的背景
Ⅳ．ボランティアコーディネーターからの歓迎の手紙
Ⅴ．ホスピスハワイの概要

Ⅵ. ホスピスハワイの組織図
Ⅶ. ホスピスケアの考え
Ⅷ. ボランティアの役割
Ⅸ. 守秘義務のフォーム
Ⅹ. 患者と家族の義務と権利
ⅩⅠ. 疼痛と症状コントロール
ⅩⅡ. 死に近づいた時のサインと症状
ⅩⅢ. ボディメカニクスと気をつけること
ⅩⅣ. 心理社会的見解
ⅩⅤ. 文化的な視点
ⅩⅥ. 死別
ⅩⅦ. スピリチュアルの問題

ⅱ）『ホスピスハワイ　ボランティアトレーニング　プログラム』（添付資料５）

1日目（4.5h）17：30-22：00

17:30-18:00　受付＆軽食
18:00-18:10　オリエンテーション
〔ボランティアコーディネーター〕
18:10-18:25　ホスピスハワイの歴史
〔ＣＥＯ〕
本チームの目標と目的
18:25-19:00　守秘義務
〔ボランティアコーディネーター〕
緊急連絡先（ボランティア中に何かあった場合）
撮影承諾書（写真をとっていいか、ニュースレターに掲載されてもよいか）
ツ反（無料で結核のテストを受ける）
19:00-19:45　コミュニティビルディング演習
〔ボランティアコーディネーター〕
1）円になり椅子に座り、順に自己紹介
2）2分間：２人１組で自己紹介
⇒【目的】知らない人と話す練習
19:45-20:00　休憩
20:00-21:30　死にゆく過程でのスピリチュアルケア
〔チャプレン〕
1）２人１組になり、今までで１番悲しかったことについて話す
2）何も言わずにただじっと聞く
⇒【目的】傾聴
21:30-22:00　質問・宿題
終了

2日目（9.5h）7：30-17：00

7:30-8:00　受付＆朝食
8:00-8:10　瞑想
〔ボランティアコーディネーター〕
8:10-9:40　死と死ぬことの心理社会的プロセス
〔ソーシャルワーカー〕
【演習】４つのカテゴリーに関する喪失体験を疑似体験し、患者と家族の気持ちを共感する目的で行う
9:40-11:10　死ぬときの疼痛と症状コントロールについて
〔引退看護師〕
11:10-11:25　休憩
11:25-12:25　遺族のお話（パネルディスカッション）
〔3人の遺族〕
12:25-13:25　ランチ
13:25-15:00　ライフライン
〔ボランティアコーディネーター〕

15:00-15:15　休憩
15:15-16:15　死に直面するとき
〔ボランティアコーディネーター〕
16:15-17:00　宿題
〔ボランティアコーディネーター〕
本日のふりかえり（相互理解・情報交換）、まとめ
終了

3日目（9.5h）7：30-17：00
7:30-8:00　受付＆朝食
8:00-9:30　傾聴　〔ボランティア〕
9:30-9:45　休憩
9:45-10:40　ボランティアの役割
〔ボランティアコーディネーター〕
仕事の説明
書類の作成
10:40-11:40　ボランティアのお話（パネルディスカッション）
〔ボランティアコーディネーター〕
11:40-12:40　ランチ
12:40-15:00　患者ケアと安全性
〔HHA 看護助手〕
Infection Precautions
15:00-15:15　休憩
15:15-16:15　ボランティアしてその後にくるもの
〔ボランティアコーディネーター〕
同意書
トレーニング後の参加（継続教育）
修了式
16:15-17:00　ふりかえり、評価、みんなでわかちあう
〔ボランティアコーディネーター〕
終了

プログラム　受講時間：計23時間、
参加費用：無料

iii）Hospice Hawaiiチームケアメンバーへのヒアリング結果

ボランティアプログラムについて
by　Caroline Odo（ボランティアコーディネーター）

1）ボランティアプログラムは、教育啓発も使命である。
2）Medicare では、ホスピスケアの５％はボランティアであることといった詳細が決められている。連邦法で決められている。＝１人の患者さんに 100 時間ケアをしたとすると、そのうちの 5 時間以上はボランティアが担当する。

目的３．Hospice Hawaiiでの実際の活動を理解するため、ホスピスハワイカイルアホーム（ホスピス病床）見学を行った。そこで、１．カイルアホームの概要、２．スタッフの募集方法について、３．スタッフへの教育について、４．ボランティアの活動内容について説明を受けた。最後に、ボランティア歴８年の実際のボランティアへのインタビューを行った。その結果を以下に示した。

6月29日木曜日8：30～
ホスピスハワイカイルアホーム見学

１．カイルアホームの概要

1）構成：看護師、准看護師、ヘルパー、ソーシャルワーカー
2）ベッド数：５
3）２４ｈ開放（いつでも来たい人が来れるようになっている）
4）１室の設備：電動介護ベッド、テレビ、

電話、クローゼット、エアコン、トイレ

5）食事：月曜～金曜は調理の人が来る、土日は冷蔵庫

6）施設：普通の家を改築

7）施設料：１ヶ月６０００$/1人 ⇒ １日２３０$（保険に該当しない人は払うのが大変）

2．スタッフの募集方法について

1）新聞の求人欄で

2）面接時には、資格はもちろんのこと、家で看取った経験を確認

3）カイルアホームの Ns の賃金は、訪問 Ns より低い。

3．スタッフへの教育について

1）何を学びたいかスタッフのニーズを聞き、それに準じた人を呼んで講習する

2）介護をするスタッフは１年に１２ｈ以上講習を受ける義務がある

3）１ヶ月に２回、チームミーティングを行う（全患者の確認）

4）病院などのセミナーに参加

5）保険会社が開催するフェアに参加

4．ボランティアの活動内容

1）患者ケア

2）部屋の修理

3）窓拭き

4）掃除

5）おむつの換え

6）お話

7）食事の手伝い

8）買物

9）散髪　etc.

5．実際のボランティアへのインタビュー

〔ボランティア歴８年の女性（オーストリア・ウイーン出身）〕

1）ボランティアで得たこと

ｉ．どうやって命が終わっていくのか学んだ

ii．患者や家族の価値を学んだ。自分の時に活かせる

iii．どうやって人を助けていけるかを学んだ

iv．１人１人ちがうから判断しないこと、我慢することを覚えた

ｖ．患者や家族に対し聞くことを覚えた

2）感想

その時がきたらここで最期を迎えたい

目的４．Hospice Hawaiiでの実際の活動を理解するため、臨床チームメンバーに訪問同行した。

その際、ソーシャルワーカー、看護師、ＨＨＡに同行し、４つの事例を経験することができた。その結果を以下に示した。

6月30日金曜日8：30～

臨床チームと在宅同行

ソーシャルワーカーに同行

ケース１．心不全（利尿剤をうまくコントロールすればすぐに亡くならない）

看護師に同行

ケース２．Nsの仕事について：症状が安定していれば血圧は週に１回だけ。

症状確認⇒症状が出ていれば薬の調整（直接的なことはほとんどしない。血圧のみ）NsはDrの目になり耳になる。

ＨＨＡ（ホームヘルスエイド）に同行
（①ナーシングホームにいる女性と、退院直後、家にいる女性の2ケース訪問）

ケース３．HHAは、ケア（日常生活の援助）をしていた。皮膚がんの創傷のコットンの換えを行っていた。

ケース４．ＨＨＡがやりがいをおぼえている。心理学の修士を修めた女性が、人間をケアすることで学んでいる。ケアをすることに興味を持ち、Nsになるために学生になることとなった。

目的５．　ボランティアコーディネーターの教育及び役割について３回講座のプログラム研修を受けた。また、研修を受けるにあたり、ボランティアコーディネーターであるCaroline Odoからボランティアプログラムについてインタビューを行った結果、以下の２点から検証を行った。

Ａ．ボランティアコーディネーターの教育について

本研修を通して、ボランティアコーディネーター（Caroline Odo）にインタビューした結果、ホスピスハワイにおいては、ボランティアコーディネーターは特殊な教育を受けていなかったことが明らかとなった。

しかし、いろいろなＮＰＯでボランティアコーディネーター養成講座があるため、在宅ホスピスに特化した講座ではないが、そのような場を教育の場として用いており、また、ボランティアリーダーのネットワークがあるため、そういった場も活用し、資質の向上に努めていることが明らかとなった。

Ｂ．ボランティアコーディネーターの役割について

ボランティアコーディネーターは、観察力の優れている人が望ましく、実際に、ホスピスボランティアプログラム時に、受講者の一人一人を注意深く観察し、ボランティアとしての資質をチェックしていた。ボランティアコーディネーターは、まずもって「思いやりのある人」、「愛情を持って接することができる人」であること。また、報告書を書きながら、電話をとり、ボランティアの問い合わせについて説明をするといった、複数にわたる作業を平行して行うといったマルチタスクな仕事にも対応できる人が望ましい。

また、ボランティアコーディネーターがボランティアをしたい人の拒否はできないため、あるボランティアが、訪問に不適切だと判断した場合は、訪問以外のボランティア活動に参加するよう導く能力が必要である。

すなわち、ボランティアコーディネーターは、ボランティアの適性を判断できる人であらねばならない。その場合の判断方法とは、ボランティアプログラムの実施前・中・後にそれぞれ評価をし、最終的に総合的な評価を行うことである。

詳しく述べると、ボランティアプログラム実施前に、「ボランティア申請用紙」（添付資料６）を配布し、受講者に記入させる。

なお、「ボランティア申請用紙」とは、名前や住所といった連絡先のほか、資格の有無や、ボランティア可能な時間、話せる言語、身元保証人等といった対象者の属性と、「ホスピスハワイでのボランティアになることにどうして関心を持ったか」、「近親者がここ最近亡くなっているか否か、またそのことがどういう影響を及ぼしたか？」、「特技や趣味」といった自由記述、実際のボランティア

の活動のうち関心のあるボランティア活動への希望をチェックする用紙である。

そして、プログラム実施前に面接を行い、ボランティアスタッフのアセスメントをし、申請用紙に評価コメントを残していた。

実施中には、受講者の表情や反応、発言、行動を適宜観察する。

プログラム実施後には、「ボランティアプログラム受講後のインタビューサマリーフォーム」（添付資料７）を用いて評価を行っていた。

なお、「ボランティアプログラム受講後のインタビューサマリーフォーム」とは、１．終了後の面接時の受講者の全体的な様子の評価、２．その人自身のこと（①性格・②成熟度・③声のトーン・④声の音量・⑤コミュニケーション能力・⑥ふるまい／表情・⑦ボランティアへの自信・⑧適応能力／危険覚悟等）といった５段階のチェック項目のほか、３．患者や家族とやっていくことのうちできるか否かのチェック、（①異なる信仰に対して・②異なる生活スタイル対して・③異なる性別に対して、④タバコを吸う人の家、⑤ペット（猫、犬、鳥など）、⑥ボランティアが患者を自分の車か患者の車で移送できる）、４．ボランティア／インタビュアーのお互いの関係・相互作用を評価するため「しっかり集中して適切に答えていたか」チェック、５．個々人について（身体・社会・環境面）を自由記述していた。記述内容は、①「身体的な制限がありますか？」、②「ホスピスハワイでボランティアをすることで何を得たいと期待していますか」であった。最後に、６．インタビュアーが「ホスピスサービスでボランティアを手助けすることに焦点をあてた際のインタビュアーの印象（他のチームの人とうまくやっていけるかの印象）」を自由記述し、評価していた。

そして、プログラム後「ボランティア活動のタイムシート」（添付資料８）を用いて、実際に活動する場合、詳細に活動を記述していた。

以上のことから、ボランティアコーディネーターは、さまざまな仕事があるが、ボランティアの資質を向上するためにも、一人一人のボランティアをよく観察し、よくコミュニケーションをとっていることが明らかとなった。ボランティアがホスピスハワイのチームの一員として活躍するためには、ボランティアコーディネーターのコミュニケーション能力が重要であった。

D．　考察

目的１．について、ｉ）Hospice Hawaiiチームケアメンバーへのヒアリング結果及び、ii）ボランティアに関することでの質疑応答の結果、ボランティアは、１年毎の登録でなく、１度登録後はやめると言わない限り登録はつづくことが明らかとなった。このことから、ボランティアがまず1年間は行ってみて、コミットメントを高めていくことの重要性を示唆され、またミーティングをもって評価することで少なくとも1年間は行い、そして引き続き継続していくことがボランティアの持続可能性につながっていると推察された。

また、インタビューしたボランティアコーディネーターは特別な養成を受けてはいなかった。全米ホスピス協会などではコーディネーターの養成（於：メインランド）があることが明らかとなった。その他、ボランティアリーダーのネットワークがあり、いろいろなＮＰＯでボランティアコーディネーター養成講座が開催されており、その場が教育の場となっていることがうかがえた。

ボランティアコーディネーターの資質としては、思いやりのある人、愛情を持って接する人が望ましいことが明らかとなった。ボランティアコーディネーターの仕事はマルチタスクであった。すなわち、報告書を書きながら、電話をとり、ボランティアの問い合わせについて説明をするといった、複数にわたる作業を平行して行っていた。そのような状況でも、ホスピスボランティアは特殊であるため、思いやりのある人、愛情を持って接する人が望ましいのであろう。

他のホスピスでのボランティアコーディネーターの情報を持っているか、若いボランティアコーディネーターはいるかと尋ねたところ、ボランティアコーディネーターと相互の情報交換はしているがホスピスボランティアコーディネーターは経験年数の長い人が多く、若い人は少なということであった。これはホスピスボランティアの特殊性、そしてホスピスボランティアコーディネーターの総合的な職務を含めて経験年数の長い人が多いと考えられる。

ホスピスボランティアは、交通費含めてすべて無償であった。ただし、万一の場合は、NHPO の保険でカバーできる。すべてのスタッフが保険に加入していた。９年間行っているが、該当は１件のみであった。アメリカのボランティアに対する保障があるため、そこで保証されていた。また、ボランティアトレーニングプログラムは無料であった。運営費用は、ホスピスハワイで予算を立てて行っていた。ホスピスハワイでは、多額の寄付があり、予算的にも運営可能であるが、日本では寄付行為がアメリカほどベーシックになっておらず、日本でのボランティア講座の運営費用に関しては今後の課題であることが示唆された。

目的２．について、ｉ）『ホスピスハワイボランティアトレーニングマニュアル』及びⅱ）『ホスピスハワイ　ボランティアトレーニング　プログラム』、ⅲ）Hospice Hawaii チームケアメンバーへのヒアリングの結果、本プログラムは、学生のためのボランティアプログラムでもあった。インターネットや学校、新聞などで募集を行い、これらのプログラムに参加することで、医学部等への啓発にもなり、地域をもかえていくことが示唆された。

ボランティアを選ぶ基準（ボランティアの資質）としては、性格のよい思いやりのある人、コミュニケーションスキルが優れている人、傾聴できる人であることが明らかとなった。また、本研究の事例検証の一部に、実地研修でのデータとの類似例の一つとして、米国地方都市における在宅ホスピスボランティアの選考と研修について参照したところ、ほぼ同様のプログラムの構成要素であったことがうかがえた（参考資料参照）。今後、さらなる文献考証を続け、トレーニングプログラムの妥当性の検証を行いたいと考える。

目的３．について、カイルアホーム見学の結果、説明を受けたスタッフの募集方法について、カイルアホームの看護師の賃金は、訪問看護師より低いことが明らかとなった。しかし、時間の融通が利くため、その利点が魅力で選ぶ看護師が多いことが窺えた。実際にカイルアホームでボランティアをしている女性（ボランティア歴８年の女性）へのインタビューの結果、ボランティアをしたことで、どうやって命が終わっていくのかを学んだと言っていた。これはまさにend of lifeの教育であり、ボランティア活動をすることでDeath Educationにも自ずとなっていることが示

唆された。

また、患者や家族の価値を学び、１人１人ちがうから判断しないこと、我慢することを覚えたというコメントから、ボランティアトレーニングプログラムでのねらいがしっかり根付いており、トレーニングプログラムのねらいが達成されていると推察された。最後に、感想で「その時がきたら自分もここで最期を迎えたい」というコメントは、カイルアホームが充実した施設であり、かつ、そこでのボランティア活動も肯定できていることであると考えた。

E．　総括

本研修は、2006年６月２８日から７月１日まで、ホスピスハワイにて１．在宅ホスピスケアにおけるボランティア活動の構成要素を明らかにすること、２．ボランティアを養成するための研修プログラムの構成要素を明らかにすること、３．ホスピスハワイカイルアホーム（ホスピス病床）見学、４．臨床チームメンバーの訪問同行、５．ボランティアコーディネーターの教育及び役割を知るという、以上５つの目的を達成するために行った。

その結果、以下のことが明らかとなった。

１．　在宅ホスピスケアにおけるボランティア活動について

ボランティアは、まずボランティア研修プログラムを受講し、そこで得たことから、専門職とチームを組んで、患者や家族に対し、「何かをするのでなく、存在すること、何かやるのでなく、そこにいてあげること」を大切にし、Spiritual Careに携わる。また、実際の活動としては、患者をベッドから車イスへ移動させたり、患者が寝たきりになった場合、着替えやおむつ交換、シーツ交換も行う。それ以外にも、趣味や特技を生かして患者や家族のサポートを行う。具体的には、患者ケアや、部屋の修理、窓拭き、掃除、おむつの換え、お話、食事の手伝い、買物、散髪などである。また、家族に対するサポートプログラムとして、１週間のうち４時間、ボランティアが行くことで４時間家族がレスパイトできる。また、遺族への１年間のフォローアップも重要な活動の一つである。電話で声をかけたり、遺族がうつにならないように注意する。

２．　ボランティアを養成するための研修プログラムについて

『ホスピスハワイ　ボランティアトレーニングマニュアル』から、「研修プログラムの目的」を筆頭に、「なぜ、ホスピスボランティアか」、「ホスピスの歴史的背景」、「ボランティアコーディネーターから」、「ホスピスハワイの概要」、「ホスピスハワイの組織図」、「ホスピスケアの考え」、「ボランティアの役割」、「守秘義務のフォーム」、「患者と家族の義務と権利」、「疼痛と症状コントロール」、「死に近づいた時のサインと症状」、「ボディメカニクスと気をつけること」、「心理社会的見解」、「文化的な視点」、「死別」、「スピリチュアルの問題」といった項目の必要性が明らかとなった。また、研修トレーニングを受講したことで、実際の研修プログラムの構成要素が明らかとなった。（前述の『ホスピスハワイ　ボランティアトレーニング　スケジュール』を参照のこと）

３．　ホスピスハワイカイルアホーム（ホスピス病床）見学

ホスピス病床を見学し、カイルアホームの概要やスタッフの募集方法について、スタッフへの教育について、ボランティアの活動内容について理解できた。また、実際に活動し

ているボランティアに「ボランティアで得たこと」などインタビューすることができた。

４．　臨床チームメンバーの訪問同行

ホスピスハワイで活動しているソーシャルワーカー、看護師、ＨＨＡに同行し、患者・家族の住む家に訪問した。

５．　ボランティアコーディネーターの教育及び役割を知る

ボランティアコーディネーターの教育については、ホスピスハワイにおいて特殊な教育をなされていなかったが、ＮＰＯ等でのボランティアコーディネーター養成講座に参加し、教育を受けていることが明らかとなった。ボランティアコーディネーターは、観察力の優れている人が望ましく、思いやりがあり、愛情を持って接することができる人であることが重要なことである。また、コーディネーターは、マルチタスクな仕事であるが、ボランティアの資質を向上するためには、一人一人のボランティアをよく観察し、よくコミュニケーションをとること、ボランティアがホスピスハワイのチームの一員として活躍するためには、ボランティアコーディネーターのコミュニケーション能力が重要であることが明らかとなった。

Ｆ．　健康危機情報

特記事項なし

Ｇ．　研究発表

「研究成果の刊行に関する一覧」にまとめて記載

Ｈ．　知的財産権の出願・登録状況

特記事項なし

（添付資料1）

Volunteer Training Schedule
Hospice Hawaii & The Pallium
Dates: June 28 to July 1, 2006
Revised Schedule June 16, 2006

Objectives:

1. Identify the components of a volunteer program in the hospice home care setting.
2. Identify the components of a volunteer training program, including:
   a. Recruitment
   b. Interviews
   c. Training classes and objectives
   d. Post-training interviews
3. Make a site visit to the Hospice Hawaii Kailua Home (Hospice residence).
4. Make home visits with a clinical team member.

Hospice Hawaii will provide the attendees with the training manuals and interview resources, etc.

Tentative Schedule

Date/Time	Activity
Tuesday, June 27, 2006 8:45 AM	Arrive Honolulu International Airport (Ken Zeri to meet you there)
5:30 PM	Dinner at the Outrigger Canoe Club
Wednesday, June 28	
Morning	Breakfast on your own, sleep late, enjoy the beach
12:00 – 3:00 PM	Lunch at Hospice Hawaii Classes: Hospice in USA: Ken Zeri Overview of Volunteer Program: Clarence Liu
5:30 - 10:00 PM	Volunteer training class at Hospice Hawaii Office Light dinner provided at training
10:00 PM	Back to hotel
Thursday, June 29	
Morning	Breakfast on your own
8:30 AM to 11:00 PM	Pick up at hotel: Tour Hospice Hawaii Kailua Home
12:00 – 3:00 PM	Lunch at Hospice Hawaii Class: Details of Volunteer Program: Caroline Odo, Volunteer Coordinator